

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 国立民族学博物館の収蔵資料と今後の活用： 挨拶にかえて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00006094">https://doi.org/10.15021/00006094</a>

## 国立民族学博物館の収蔵資料と今後の活用

### — 挨拶にかえて

須藤 健一

国立民族学博物館

皆さまこんにちは。本日の国際ワークショップ「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有—民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」には、アメリカ合衆国からの3名の発表者をはじめ、多くの方々にご参加頂きましてまことにありがとうございます。

国立民族学博物館（民博）館長の須藤です。開会にあたり一言ごあいさつを申し上げます。本ワークショップの趣旨については主宰者である本館助教の伊藤敦規さんが説明しますので、私は民博の収蔵している民族資料の活用の可能性についてお話したいと思います。

民博は、1974年創設、3年後の77年に開館しました。博物館機能をそなえ、大学院教育も行い、また大学共同利用機関としての役割を担う、世界でも類例のない文化人類学とその関連分野の研究所です。約60名の教員たちは世界各地で研究調査を行う一方で、種々のプロジェクトを組織し、国内外から多くの研究者を招いて、人間と文化に関する総合的研究をすすめています。

本年度（2013：平成25年度）は、国際・国内共同研究46プロジェクトが組織され、国際シンポジウムなどの国際集会在が23回開催されます。共同研究員、研究集会への参加者、国内外の客員教員や外来研究員など、民博を活用してくださる国内外の研究者は1,200名を数えます。まことに光栄なことです。

博物館活動においては、世界各地から収集した多種多様な民族資料の保存・整理・展示、および映像・音響資料の撮影・採録・編集・公開を行っています。現在、約34万点の民族資料、約7万点の映像・音響資料、約65万点の文献図書資料を収蔵しています。昨年度は約21万人の入館者がありました。

民博が創設時に収蔵していた民族資料は約3万点でした。そのほとんどは、アチックミュージアムや東京大学理学部人類学教室から移管されたものです。それ以降、民博の教員たちは、調査地の人びとの生活、文化や世界観などをより深く理解するために民族資料を積極的に収集してきました。収集方法は、教員の直接収集、他機関からの一括購入（たとえば、ニューヨーク州のルオンゴ・コレクションなど）、個人もしくは団体からの寄贈、公的機関からの移管などです。20世紀後半に、世界各地の人びとがつくり、使っていた物質文化の膨大なコレクションを収集・収蔵する民族学博物館は、世界でも民博だけかと思います。しかし、展示されているのは1万点余にすぎず、ほとんどの資料

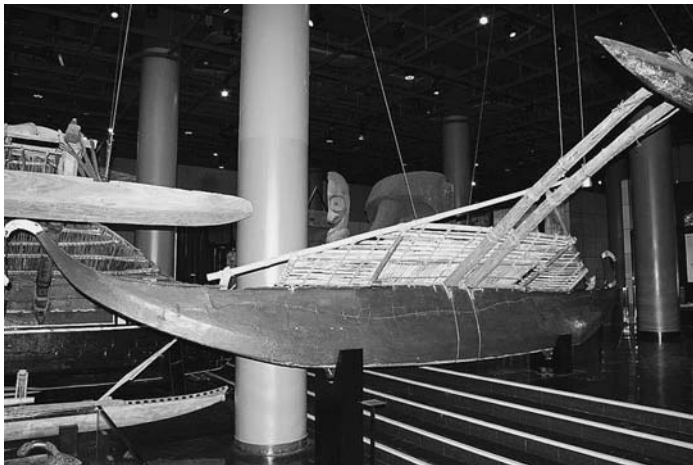


写真1, 2, 3 ヤップ島で1977年に収集し民博に展示中のカヌー

は収蔵庫に横たわっています。

さて、民博では収集開始後40年が経ちました。その間、地球規模で生活様式が大きく変化しています。民博が収集した多くの資料は、今では現地で製作も使用もされず、消えゆく状況が起きています。つまり、民博資料が現地において「文化財」的な価値をもつようになっていることに、私はこの数年で何度も気づかされました。つまり、民博の「モノたち」は、その収集地コミュニティとの間で新たな関係を結びつつあるのです。ここで私が経験してきたいくつかの事例を紹介したいと思います。

まずは、失われゆくカヌーについてです。私がオセアニアのヤップ島で1977年に収集したチュクピンとよばれるカヌーは、ヤップでは建造されなくなっていました。ヤップではいま、伝統的航海術の復興運動と博物館建設の機運が高まり、本館収蔵のそのカヌーをモデルに伝統カヌーを復元したいという申し出があります（写真1, 2, 3）。

二つ目は、里帰り展や熟覧による現地コミュニティの「民族認知」や「文化復興」への貢献です。2009年には台湾の順益台湾原住民博物館に、100年前の日本統治時代に収集された台湾原住民族の民博収蔵資料約200点を里帰りさせました（写真4）。展示の開幕式で原住民族の長老は「こんなくだらないもの（普段使っていたので保存しようとも思わなかったもの）をよーく今まで大切に残しておいてくれたものだ」と民博に謝意を表してくれました。いま、台湾原住民族の人びとは、失われた文化を複製ではなく「複製」（古来の資料にもとづいて新しいものを創造）することで、民族の誇りを取り戻し、中央政府から「民族認知」を獲得する活動を展開しています。



写真4 順益台湾原住民博物館での里帰り展の様子



写真5 蔚山博物館での里帰り展の様子

また、2011年に開館した韓国の蔚山博物館は、民博収蔵の「蔚山コレクション」250点を用いた特別展を開催しました(写真5)。展示品は、蔚山の大理の農村で70年前に日本の民族学者渋沢敬三が主宰するアチックミュージアムの調査研究の一環として収集した生活用具類で、韓国の近代化によって現地社会ではなくなってしまったものです。展覧会を見た高校生たちから「よくも私たちの祖父母たちが使っていたものを残しておいてくれた」と感謝されました。この特別展には蔚山市民の2割、約10万人が観覧に訪れたとのこと。韓国の人びとが、ものをとおして歴史を認識し、自文化を理解するのに貢献できたといえます。

三つ目は、ソースコミュニティ(モノをつくり、使ってきた社会)の人びととの連携についてです。先住民族アイヌと民博とは長年、親密な関係を保ってきました。民博が収蔵する約5,000点のアイヌ資料の十全な保管と後世への確実な伝承を目指し、毎年アイヌの人びとを招いて「神々に祈りをささげるカムイノミの儀礼」を実施しています。この儀礼で用いる祭具は、収蔵庫で保存している資料です(写真6,7)。この儀礼は、アイヌ資料に魂を入れる、つまり文化的生命力を回復させるための取組の一つです。

また、民博はアイヌの伝統工芸伝承者を受け入れています。伝承者たちは毎年秋に3週間ほど民博の収蔵庫にこもり、アイヌの資料を熟覧します。古い資料を生みだした制作技術やデザインを学び、現代の自身の作品制作に活かしています。これは、民博収蔵の資料が、アイヌ文化の復興と創造に役立つことを願っての企画です。

最後は、アメリカのズニ博物館(アシウィ・アワン博物館・遺産センター)との協働についてです。私は、2012年6月にニューメキシコ州のズニ保留地にあるズニ博物館館長のジム・イノーテさんと学術協定を結びました(写真8)。イノーテ館長は2009年2月以降、何度も民博を訪れ、民博が収蔵するズニ資料31点を熟覧して、資料情報の誤記





写真6 2014年11月27日のミンバク オッタ カムイノミの様子



写真7 2015年11月12日のミンバク オッタ カムイノミの様子



写真8 2012年6月3日のズニ博物館での学術協定の調印式

を訂正し、ズニの文化的文脈に則った資料保存の方法などを教えてくださいました。私たちがズニ資料に関する深い知識を得ることができる有意義な経験でした。ズニの喜びとにとっても、自分たちの資料の海外の所在、点数、保管状態、資料情報の適正さなどを確認することができ、これまで直接関与できなかった資料管理に携わる契機となった点で、同じく有意義だったと思われます。

なお、ズニ博物館は2009年からアメリカの国内外の博物館が所蔵するズニ資料の情報を一元管理化するためのデータベースの構築を進めており、ここにおられるアリゾナ州の北アリゾナ博物館館長のロバート・ブルーニグさんなどと密に連携をしています。ズニ博物館と関連博物館とが構築するデータベースには、この場におられるズニの伝統宗教の指導者であるオクテイビアス・シオウテワさんのような賢者によってチェックや伝統的知識の公開・非公開に関する適正作業も行われるそうです。このプロジェクトは世界の博物館に散らばる自分たちズニの文化遺産情報を統合管理する実践的研究といえます。

これまでお話しました4つの事例が私たちに語りかけてくることは、先進国の博物館がいま、民族資料を提供してくれたソースコミュニティの喜びとから収蔵資料の物理的な返還ではなく、里帰り展示、熟覧などの資料の共用と情報の共有などを要請されているということです。後ほど本館教授の岸上伸啓さんが報告しますが、民博は現在、そうした要求に応えるために、本館収蔵の民族誌資料について、収集先の喜びとやその地域の博物館との間で、双方向的で互酬的な活用を推進するために、「フォーラム型情報ミュージアム」の構築に向けた準備を進めています。

本日のワークショップは、民博が収蔵する資料の情報の新たな収集や共有のあり方について参加者の皆さまと具体的に意見を交わす貴重な機会であります。まずは、ズニ博物館や北アリゾナ博物館の取組とか、ズニの宗教指導者のご意見をうかがうと同時に、アメリカ先住民だけでなく、ほかの諸民族の事例についても北海道大学と本館の教員などに発表してもらおう予定です。本ワークショップにおいて民博が世界の民族集団に対して貢献可能なことと、研究機関としての文化人類学研究の新たな展開の可能性などについて議論されることを楽しみにしています。その議論をとおして、民族学博物館の将来のミッションとその実践についての展望が開けますことを期待しております。

最後に、本日のワークショップに参加くださいました皆さまに感謝するとともに、今後とも民博へのご支援、ご協力、とりわけご批判をお願いして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。